

地域の様子を知る

4 伝建地区の社会構造 セクション2: 祭り組織

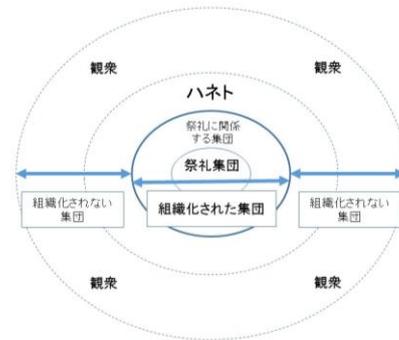
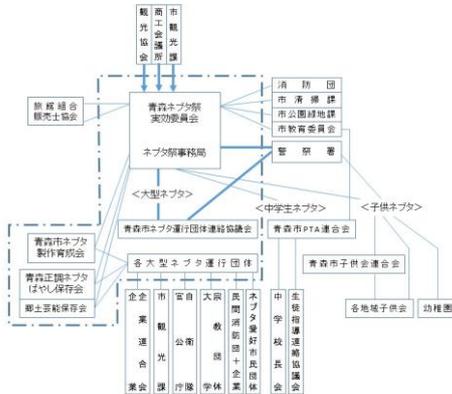


図1 青森ネブタ祭りを「演出する」諸集団のネットワーク 図2 青森ネブタ祭りの集団構成¹⁾

社会学者・田中重好は、都市の祭礼を捉えるアプローチとして資源動員論、集合行動論、シンボル分析の三つを挙げている。第一の資源動員論とは、祭りを様々な社会的資源(人、資金、物資、技能など)が動員される過程として見る方法である。第二の集合行動論とは、緩やかに組織化された群衆の生態として祭りを見る方法である。第三のシンボル分析論は、文化人類学、特に構造主義の成果を踏まえ、祭りの中に生と死、秩序と破壊といった文化的意味をくみ取ろうとする方法である。田中は第一の資源動員論を用いて青森のねぶた祭りを分析し(図1、図2)、祭り和社会構造の関係を以下のように述べている。

「祭りの変遷は、都市社会の変動を映し出す鏡である。また、祭りは都市に沈潜する心性を表現している。この心性は直ちに社会構造を突き動かす力にはならないが、都市の雰囲気を作り出し、そこに暮らす人々の地域との関わりを暗黙のうちに造り出している。また地震の揺れの分析から地殻構造が分析できるように、祭りは地域の社会構造を目に見える形で現出する機会でもある。こうしたことに注目すれば、祭りは都市に潜在的に組み込まれた共同性であるといえる。」²⁾

かつて地域の祭りへの参加はそこに住む者の証であり、通過儀礼の意味を持ったが、現在、景気の後退や高齢化によって、地域の祭りを支えてきた社会的資源が変調をきたし、地域住民だけでは維持できなくなった。こうした変動は祭りの中に克明に映し出される一方、地域の共同性が再編される好機ともなる。つまり、伝建の祭りの変容を資源動員論的に注視することで、現代における伝建の共同性の一断面を素描できる、と考えられる。

第二の集合行動論から見た都市と祭りについて、社会学者・松平誠の先行研究が挙げられる。松平によれば、江戸以来、都市の祭りが「町内」を単位として執り行われ、時代とともに変容してきた。ここで松平による祭り分析の前提について、二点押さえてみたい。

まず、松平の言う「町内」とは、「土地所有者や家屋所有者を構成員とし、町に住んで暮らす土地持ち、家持ちの生活の共同を確保するために考えだされた仕組み」を指す。ここでいわれる「土地所有者や家屋所有者」とは、その町で財を成した豪商たちで、彼らが「一層大金を投じて出し物を飾り立て、「町内」で働く職人たちを動員してこれを持ちだした」³⁾のが商業町の祭りの実態であった。一方で、土地を持たない裏長屋の住民は「町内」にカウントされず、祭りにも参加できないという階層構造(位相的秩序)を有した。

次いで、明治以後、消防や警察といった組織が近代化していったが、「町内」運営や祭りの運営において、先に触れた階層構造(位相的秩序)が解消されることはなかった。これと同時に、会社勤めの住民が増えることに

よって、地縁関係が希薄になり、「町内」は変容し、祭りも変容を余儀なくされた。

この結果、松平を筆頭に、多くの識者が血縁、地縁、社縁といった「選べない縁」に代わって、知縁などの「選べる縁」に注目し、現代の祭りや「町内」の変容を説明しようと試みてきた、といえよう⁴⁾。

ここからは、とちぎ秋まつりに関する研究成果の一部を紹介する。

現在のとちぎ秋まつりは2年に1度開催され、午前中は各町内を人形山車が練り歩き、午後になると栃木大通り(蔵の街大通り)に人形山車が勢揃いし、夜まで巡行が行われている。このまつりの源流を遡ると、1872年(明治5年)11月、明治政府が神武天皇即位年を紀元と定めたことを受け、鍋島幹・初代栃木県令は祭政一致を顕現すべく、1874年(明治7年)に栃木県庁構内に神武神社を創建した。1874年(明治7年)、県庁構内で神武祭礼が行われたが、倭町三丁目(東京日本橋の町内)が所有する山王祭出御の静御前の山車を購入し参加した。これを機に山車への関心が高まり、1893年(明治26年)に栃木県最初の商業会議所開設が認可された際にも山車祭りを開催し、稀にみる賑わいを呈した⁵⁾。1937年の市制施行祝賀以後、5年毎に開かれることとなったが、2000年に「蔵の街大通り」と命名されたシンボル・ロードの完成記念、2001年に市制六十五周年記念祝典、2003年に栃木商工会議所百十周年記念して山車が巡行し、2006年以後はとちぎ秋まつりが隔年開催となっている。

とちぎ秋まつりは様々な組織のサポートを得ているが、ここでは職方(棟梁や鳶)について触れてみたい。かつて、栃木には複数の豪商が存在し、そこへ出入りした多くの職人が職方として秋祭りを支えてきた。しかし、戦後には豪商が消え、蔵の新築・改修が行われなくなり、職人が地域との結びつきを弱めざるを得なくなった。こうした状況を踏まえ、1997年に「うだちの会」が組織された。この会は建築の専門家が集い、栃木の蔵やまちづくりを学習するための組織であったが、秋祭りでは職方のいない町内への技術サポートを行ってきた。現在、地元の大工によって職方を担っているのは万町二丁目、三丁目だけで、他の町内には「仁徳会」、「室町山車保存会」といった山車運営団体が組織されている。こうしたネットワークは地域内の住民のみならず、地域外の技術者や有志が参加でき、山車の運営を契機として地域内外のコミュニケーション促進に寄与している。

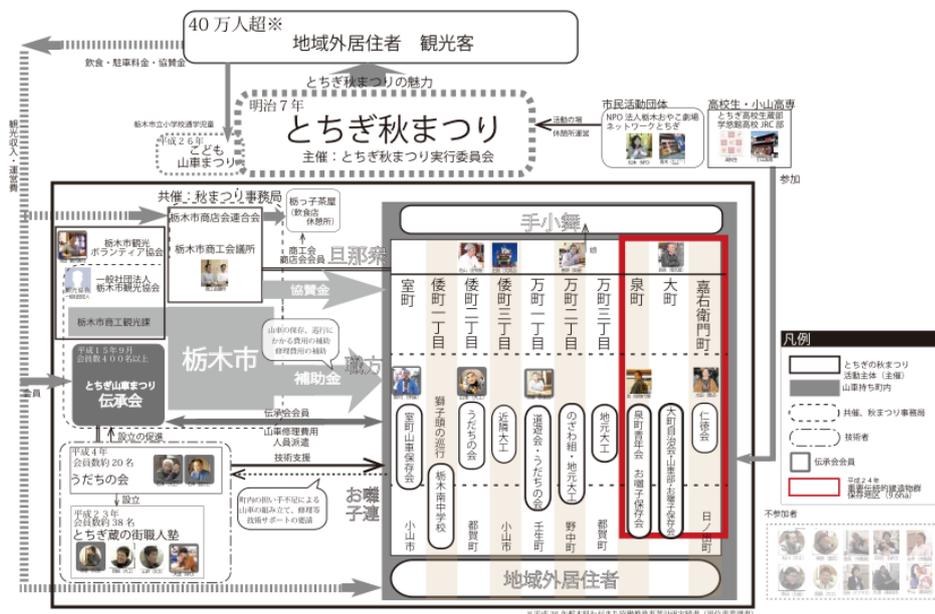


図3 現在のとちぎ秋まつりを演出する諸集団のネットワーク

参考文献

- 1) 田中重好: 共同性の地域社会学 祭り・雪処理・交通・災害、ハーベスト社、pp.110-111、2007年2月
- 2) 田中重好: 共同性の地域社会学 祭り・雪処理・交通・災害、ハーベスト社、p.83、2007年2月
- 3) 松平誠: 祭りのゆくえ、中央公論新書、p.17、2008年3月
- 4) 阿久津昌三: 第八章 都市空間と祭祀空間 祭の都市社会学にむけて、都市社会学、有斐閣ブックス、p.167、1999年7月
- 5) 栗野健太郎: 第四篇 最近世 第四章 商業都市栃木の発展過程、栃木郷土史、p.300、1952年